

開学二十周年記念号によせて

院長 大木 金次郎

現下のわが国においては、大学の改革が一つの社会問題化している。それは学生や教師による造反的改革運動ないし意欲的革新運動の前哨戦的事態によって喚起されたように思われている。勿論それが一つの重要な誘因であったことに間違いないが、本来的な大学改革への挑発は、二十年余も経過しているのに、新制大学制度が日本の土壤に十分根づかないで培養されえなかつたことが根本的要因であるといえるのである。

(i)

わが国の戦後に採用され現存している新制大学制度は、日本人が好むと好まざるとに拘らずアメリカの教育制度の移植であるために、この教育制度の最も核心をなしている図書館の利用による学生の自主的研修の指導方法などについての知識と経験を、大部分の大学教授がもっていなかったことと、ついで新制大学制度に伴う図書館の施設と設備の不整備、一般教育課程の軽視、それに由来する文科系の自然科学の貧弱な実験室、少数者のための講義室、ゼミ指導特別教室等々に対して、国

公私立の大学の管理、運営の責任者が、高い費用の支出をなしえなかつたのみならず、敢て支出しようともしなかつたこと、ならびに構内の学生厚生施設についての綿密な配慮が全く欠如していたことなどから生じた新制大学制度の教育と研究の指導、管理および運営上の行詰りのひびみが、年々蓄積されてきたことが、大学改革の要望の真因であつて、それらの事実が二十年後の現在にまたま露呈しはじめたに過ぎないのである。この伏在的、多角的な欠陥が、学生の学内における暴力行為によつて時をえがおに顕在化に誘導されたわけである。

従来、わが国の国公立の大学や短大の大部分の教師は、旧制大学の教育を受けた人々であつて、新制大学制度を文字の上では理解していたとしても、自らが実践的な訓練を受けていないので、旧制大学時代に自分が享受した学問の研究や教育方法から脱皮できないで旧態依然として旧制大学方式——例えば講座制の保持、および各学部の自主独立を強調するセクショナルリズムの排他的な研究と教育設備の運営の方法——による授業指導に専念してきたことなどの一事例を挙げるだけでも、大学の現状批判への明確な論証となるであらう。新制大学制度には講座制などはない筈であるのに、旧制大学ことに旧制の一流の国立大学の多くはポスの派閥意識にもとづく、講座制という封建的体制をいまなお温存しているのである。この事実については、文部省の各種の方策や文書、中央教育審議会の答申の内容を一瞥するだけでも容易に理解できるであらう。また新制大学における学生に対

(iii)

する基本的な指導方針は、学生が教室において担当教師から学期の始めに与えられる当該学期中のアッサインメント・シートにもとづき、図書館で学生が自主的に十分に予習準備してから、その科目の教室に出席し、指導教師と指導される学生とが対話をするという方式がとられなければならないのである。このことはある種のゼミナール教室においてはいま行われているとしても、多くの場合は、大教室に学生群集を集めて大演説会まがいの講義を主として行わなければならないように運営されているのが日本の大学における現状ではないだろうか。他方、私大においてさらに緊要なことは、前述のように授業料収入に大方は頼らなければならない貧弱な財政のために、本来の新制大学制度の精神が十分に発現できなかったことも大きな原因である。勿論、短大とても例外ではない。短大は新制大学制度発足の当初から「(当分の間)」という条件句がついていたが、短大協会の奮闘努力によって数年前この条件が法的に排除され、現在では正式に大学の仲間入りしたわけである。しかし、日米いづれにおいても、現在、男子の短大(日本の各種学校や国立の高等専門学校は別)は激減していて、短大の大部分は女子短大となっている。

わが国の大学数は戦前四十数校であったものが現在では八六一校で四年制三八二校、短大四七九校である。学生数は前者が一二七万人、後者は二六万人弱である。女子学生数は四年制大学において一八%、短大において八二%である。女子学生数はアメリカに対比して非常に低いので、日本の

女子短大志望者は日本人の生活水準から類推してみても、まだ増加する可能性は十分あると思うが最近の傾向としては、女子学生の志願者は、四年制学部へ希望するものが急テンポに増加している。しかし、例えば、もし日本の女子短大でも、ニューヨークにあるベネット女子短大が実施しているような新しい方策によるカリキュラムを積極的に採用してゆけば、或る種の特徴を出すことによって女子短大の存在価値がさらにその重要性を認められるようになるものと思う。

青山学院女子短大は、明治、大正、昭和を通じての歴史と伝統をもつ旧青山女学院専門部の高い学問的水準をいままなお継承しているうえに、現在の充実した教授スタッフの意欲的な研究と教育活動によって、ますます社会的に高い評価をえていることは認められてよいであろう。なお最近、短大の全校舎が新築され、凡ての施設と設備が近代化されたことによってもまた全国的に一層の注目をあびているし、また短大においてとくに本学創立以来の建学の精神であるキリスト教主義にもとづく人間形成の教育と指導が堅持されてきたことにより日本各地の多くの家庭の信頼をえてきていることも忘れてはならないと思う。

開学二十周年を迎える本学の女子短期大学の将来の発展の上に、神のご恩寵が豊かに加えられるよう念願するものである。